



金子 昇

三輪ひとみ
平林智志

北島美香
大沼百合子
新井裕介
桐山浩一

吉田幸矢
松永玲子

大出 俊



ここから 歩き始める

企画のねらい

日本における平均寿命の大幅な伸びや、少子化などを背景として、社会の高齢化が急速に進んでいます。それに伴い、認知症高齢者も大きな社会問題になっています。平成24年に、65歳以上の認知症の人は約462万人でしたが、平成37年には、約700万人、65歳以上の高齢者の5人に1人になると推計されます。高齢者を家族や地域でどのように支えていか、また、高齢者自身の意欲や能力をどのように生かしていくかを考えることは、これからの私たちの大きな課題です。

この作品は、「認知症を共に生きる」をテーマに、高齢者問題を人の幸せと尊厳を守るという人権の視点から捉えます。認知症の親を持つ主人公とその家族の中で繰り広げられる介護をめぐる葛藤ときずなの紡ぎなおしを描くことで、高齢者が人間として誇りを持って生きていく上で大切なことについて、家族や地域の視点を通して考えるきっかけとなるドラマ教材です。

企画／兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会
制作／東映株式会社

■上映時間 34分 本体価格 80,000円(税抜)
DVD… 字幕副音声版 (C#6451)



商事会社の課長・岩崎信介のもとに、姉・早苗から「父が倒れた」という電話が入る。一人暮らしをしている父・功一が、熱中症で倒れ病院に運ばれたのだ。病院で、功一は認知症と診断される。

早苗も嫁ぎ先での介護があり、信介が功一を自宅に引き取る。信介の妻・恵子は急なことで戸惑う。功一は、家族の名前を間違えたり、ガスコンロを消し忘れていたりするなど、認知症の症状が出ている。功一は寿司職人だったこともあり、恵子の作る食事も気に入らない。功一の孫・蓮だけが功一をかばう。



ある日、功一がいなくなる。信介、恵子、蓮と早苗で功一を探す。地域の認知症サポーター・花房美紀の協力も得て、功一は花屋で発見される。功一は、亡くなった妻の月命日の墓参りのために花が欲しかったのだった。

信介たちは、功一をつれて墓参りに出かける。そのあと、家族みんなで近くの砂浜まで下りる。信介は、中学生の頃、功一に寿司屋を継がなくていいと言われたことが心のわだかまりになっていた。功一が砂で寿司を握り始める。その様子を見ているうちに、信介の心はほぐれていくのだった。



学習のねらい

- 超高齢社会を迎え、日常生活の中で、どうすれば高齢者の尊厳が守られ、その豊かな経験や知識が尊重され、活用される地域社会づくりができるかを考える。
- 身近な人々との関係づくりやコミュニケーションのあり方について振り返り、相手を尊重した言葉遣いや行動ができてきているのかを考える。
- 認知症に対しては、正しい理解と、適切な対応をするための知識と技術が必要であり、そのためにふさわしい相談窓口・治療の方法があることを認識する。
- 自分自身や家族一人ひとりのこれからについて思いを巡らし、それぞれが安心して幸せに暮らすためにできることについて見つめ直す。